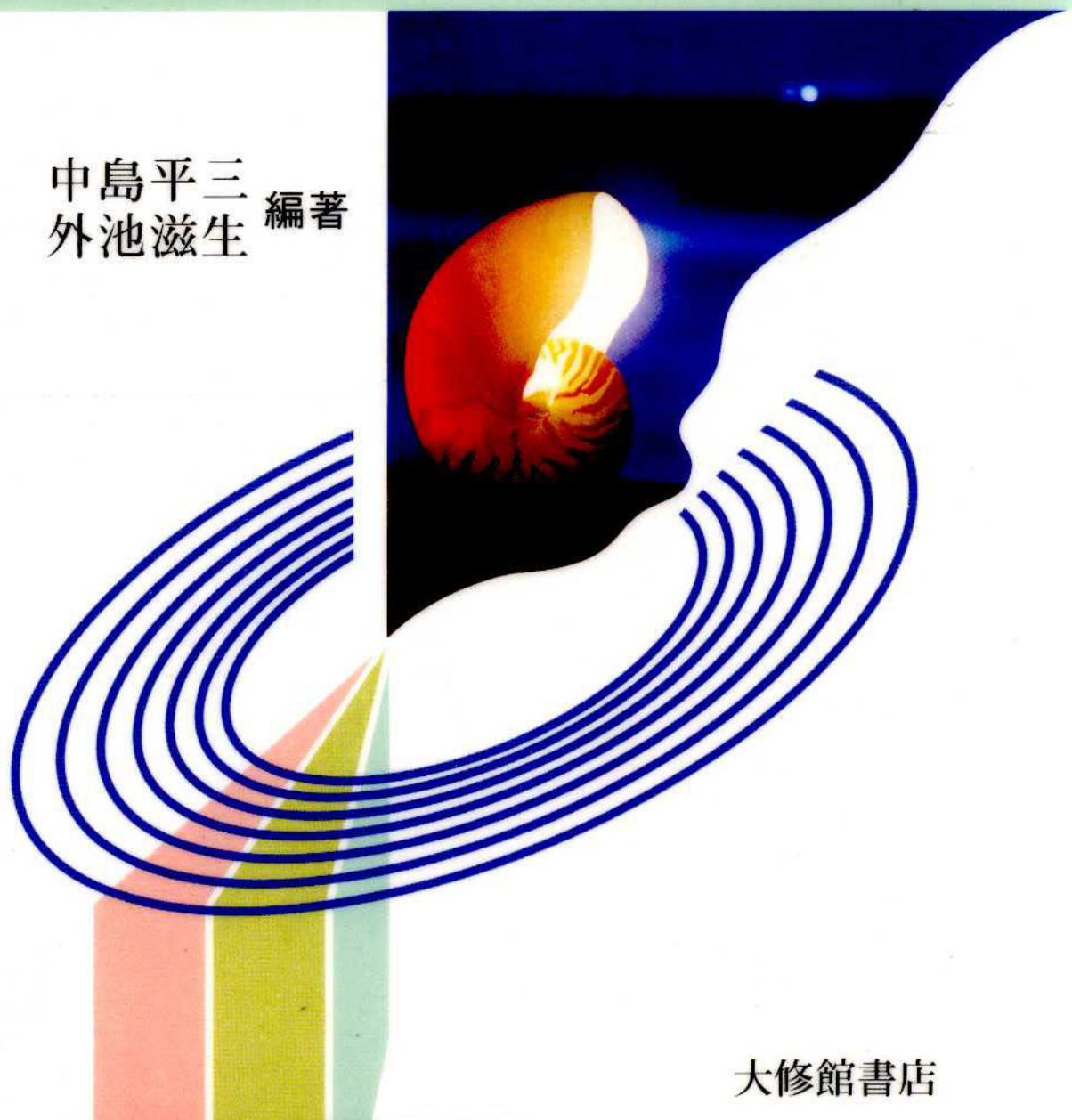


言語学への招待

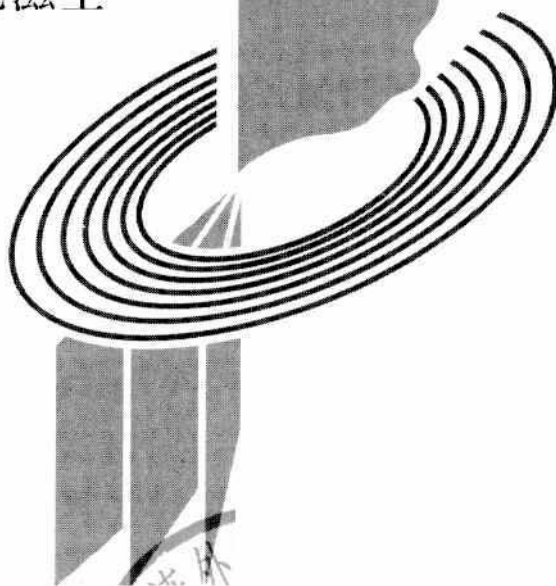
中島平三 編著
外池滋生



大修館書店

言語学への招待

中島平三 編著
外池滋生



大修館書店

編著者紹介

中 島 平 三 (なかじまへいぞう)

1946年 東京生まれ

1972年 東京都立大学人文科学科大学院修士課程修了

1982年 アリゾナ大学大学院言語学科博士課程修了 (Ph. D.)

現 在 東京都立大学教授

著 書 『文II』(共著, 研究社), 『英語の移動現象研究』
(研究社), 『英語変形文法』(共著, 大修館書店),
『一歩すすんだ英文法』(共著, 大修館書店),
Current English Linguistics in Japan (編著,
Mouton de Gruyter), など

外 池 滋 生 (とのいけしげお)

1947年 滋賀県生まれ

1971年 東京都立大学人文科学科大学院修士課程修了

1979年 ハワイ大学大学院言語学科博士課程修了 (Ph. D.)

現 在 明治学院大学教授

著 書 『新英語学辞典』(共著, 研究社), 『英語変形文
法』(共著, 大修館書店), 『チョムスキー小事典』
(共著, 大修館書店), 『一歩すすんだ英文法』(共
著, 大修館書店), 『日本語のヴォイスと他動性』
(共著, くろしお出版), など

言語学への招待

© H. Nakajima 1994
S. Tonoike

1994年3月1日 初版発行

1996年5月20日 四版発行

編著者	中 島 平 三
	外 池 滋 生
発行者	鈴 木 荘 夫

発行所 株式 大 修 館 書 店
会 社

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 03-3295-6231(販売部) 03-3294-2356(編集部)

印字/写研 製版/近藤製版 印刷/横山印刷 製本/関山製本
装幀/岡崎健二 ISBN4-469-21184-2 Printed in Japan

まえがき

言語学はここ20～30年の間に大きく変貌を遂げてきている。かつては、ややもすると堅苦しく権威主義的な黴臭い学問ととらえられがちであったが、最近の言語学は自由な雰囲気のもとでいきいきと研究が展開されている。隣接領域からも学際的な共同研究が求められるような開かれた研究領域である。

言語研究が活発になってきた最大の原因は、最近の言語学が、日常的に使われていることばに関心を向け、それを手がかりにして人間の本質を探ろうとしているためである。その結果、言語研究の方法が大きく変わり、研究対象が著しく拡大し、同時に言語研究が私たちにとって大変身近なものになってきた。ふだん使っていることばが研究の対象になるのであるから、言語学の糸口は、少し注意してみるならば、どこにでも見つけ出すことができるのである。

本書の大きな狙いは、初めて言語学に接する人に、ことばについて意識的に考えるようになるきっかけを提供することである。本書を一読することにより、ことばがわれわれの生活に深く息づいていることを実感として受けとめ、ことばとはなかなか不思議でおもしろそうだと感じられるようになれば、その狙いは十二分に達成されたことになる。

こうした目標のもとに、本書では多様なテーマを用意している。言語学の書として不可欠な事柄から、日常生活に関連した周辺領域にまたがるものまで、20のテーマを取り上げている。それらの中には「ことばとコンピュータ」や「ことばと性」「ことば遊び」など、私たちに身近なテーマも含まれている。

各章では、それぞれのテーマへの導入となるような内容と共に、いわばその章の「目玉」となるトピックが少し多めに紙幅を割いて論じられてい

る。そのような議論を通して、言語研究の実例だけではなく、その背後にある方法論についても垣間みることができるよう配慮したつもりである。またどの章も、平明かつ丁寧に記述するよう心掛けている。原則的に1人の執筆者につき1つのテーマに限定しているのも、記述を急いで雑になることを避けたいためである。また、専門的な用語や概念を解説することや、高度に専門的な議論を展開することはできるだけ避けている。こうした目論見が成功しているかどうかについては、大方のご批判を俟ちたい。

本書の執筆者と執筆項目は、次の通りである。

- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. ことばの起源 (中島平三) | 11. 意味の構造 (岩下俊治) |
| 2. 動物のことば (瀬田幸人) | 12. ことばの運用 (保阪泰人) |
| 3. 人間のことば (長谷川信子) | 13. ことばの多様性と普遍性 (外池滋生) |
| 4. 世界の言語 (山田義昭) | 14. ことばの習得 (足立公也) |
| 5. 言語の変化 (松下知紀) | 15. ことばと脳 (萩原裕子) |
| 6. 文字の発達 (吉野利弘) | 16. ことばと社会・文化 (森岡芳洋) |
| 7. 音の構造 (川越いつえ) | 17. ことばと認識 (浜口稔) |
| 8. 語の構造 (河東東雄) | 18. ことばとコンピュータ (外池俊幸) |
| 9. 文の構造 (鈴木右文) | 19. ことばと性 (川越いつえ) |
| 10. 談話の構造 (水野佳三) | 20. ことば遊び (瀬田幸人) |

本書の目標に少しでも沿うよう執筆者には幾度となく、大小様々な修正や書き直しをお願いした。面倒な要請に快く応じてくれた各執筆者の労を多としたい。大修館書店編集部の米山順一氏には、本書の企画から完成に至るまでたくさんのご協力と励ましを戴いた。記して心から御礼を申し上げたい。また、難解と思われがちな言語学を分かりやすく書くことの重要性や技法を、各執筆者に実践的に教えて下さった東京都立大学名誉教授・学習院大学教授の今井邦彦氏に、深い感謝の意を表したい。

1994年1月

中島平三
外池滋生

目次

まえがき — iii

1 ことばの起源 — 3

言語起源に関する諸説/3 考古学的手がかり/5 解剖学からのアプローチ/7 言語年代学/9 霊長類学からのアプローチ/10 ことばの進化/14
●課題/15

2 動物のことば — 16

動物のいろいろな「ことば」/17 伝達手段としての動物の「ことば」の特徴/23 ●課題/29

3 人間のことば — 30

ことばの「内容的」特性/30 ことばの「構造的」特性/33 ことばの特性と言語研究/40 ●課題/42

4 世界の言語 — 43

世界の言語の数/43 言語の話し手の数/44 言語の親族関係/46 言語の形態的分類/50 言語の語順と普遍特性/52 ●課題/55

5 言語の変化 — 56

音の変化/56 文法、語法の変化/60 語彙の変化/63 意味の変化/65
英語にみられることばの変化/67 ●課題/70

6 文字の発達 — 71

文字の発達/72 英語の音声と綴り字のギャップ/77 ●課題/78

7 音の構造 — 79

言語音の分類/80 言語音の体系/86 音の変化/88 ●課題/94

8 語の構造 — 95

単語/95 形態素/97 語の構造/99 語形成のプロセス/101 ●課題/
105

9 文の構造 — 106

統語構造/106 句の構造/107 単文の構造/111 補文の構造/112 変
形/114 島/118 ●課題/121

10 談話の構造 — 122

談話にかかわる機能的概念/122 談話上の理由により必要となる構文/
126 談話上の理由による制約/130 ●課題/133

11 意味の構造 — 134

語の意味/135 句と文の意味/139 主題役割/141 ●課題/144

12 ことばの運用 — 145

コミュニケーションの要因/147 言語行動の研究/152 ●課題/153

13 ことばの多様性と普遍性 — 154

多様性と普遍性/154 言語類型論/155 原理と媒介変数によるアプローチ/159 普遍文法とは/166 ●課題/167

14 ことばの習得 — 168

言語習得過程/168 言語習得過程の諸側面/173 言語習得の理論/178 ●課題/185

15 ことばと脳 — 186

ことばの脳機能局在論/186 脳の理解のレベルと研究方法/187 ことばの発生とニューロン/188 脳の言語領域/190 失語症研究/192 事象関連電位/197 脳の異常な発達による障害/199 ●課題/201

16 ことばと社会・文化 — 202

ことばと社会/202 ことばと文化/211 マスメディア/214 ●課題/214

17 ことばと認識 — 215

ことばによる認識とは何か/215 言語生物〈ヒト〉の認識/217 言語機械〈ヒト〉の認識/219 文化におけることばと認識/221 メタファーによる認識/224 ●課題/226

18 ことばとコンピュータ — 227

ワードプロセッサにおけることば/227 ことばを研究する道具/230 人間＝計算する機械/233 ●課題/237

19 ことばと性 — 238

言語にみる性差/239 言語における性差の研究/240 英語にみる性差/
244 日本語の中の女ことば・男ことば/247 女性差別のことば/249
●課題/251

20 ことば遊び — 252

音声によることば遊び/252 文字によることば遊び/262 ●課題/267

参考文献 — 269

索引 — 279

言語学への招待

1

ことばの起源

人間のことばはいつ頃、どのような形で誕生したのだろうか。このテーマはいつの時代にも人々の興味をそそり、古来いろいろな分野から様々な説が出されてきた。1866年のパリ言語学会では、あまりにも諸説が紛々として出されるので、以降言語の起源についての発表を禁じるという決定が下されたほどである。従来の諸説は憶測の域を出ないものが多かったが、最近になって学問的な研究が盛んになり、注目すべき進展がみられるようになってきている。

◆言語起源に関する諸説◆

《最古の言語は何か》

ヘロドトスによると、古代エジプト王プサメティカス（紀元前7世紀）はどの言語が最古の言語であるかを知ろうとして、2人の新生児を雌の羊に育てさせるという実験を行った。ことばに接することなく育った子供の口から発せられる言語こそが、人類最古の言語であると考えたのである。最初に発せられた語は、フリギア語（紀元前1000年頃小アジア地方で話されていた言語）のパンに当たる bekos であったといわれている。

スコットランド王ジェームズ4世（15世紀）も同類の実験を行った。^{ろう}聾啞者の召使いに育てられた2人の子供が話すようになった言語は、ヘブラ^あイ語であったという。

ヘブライ語が世界最古の言語であるという説は、聖書研究家や、中世・ルネッサンス期の哲学者などによっても広くとられてきた。19世紀の文献学者ギルクリストは、ヘブライ語の文字が音を発音する際の舌の形と対応しているという理由から、ヘブライ語起源説を主張している。

古代インドでは、サンスクリット語が人類最古の言語であると考えられていた。この説は今世紀の言語学者イエスペルセン (O. Jespersen) によってもとられている。サンスクリット語こそが完全な言語であり、その後言語は次第に不完全な方向へ変化していったという。

17世紀の哲学者スピノザはサンスクリット語起源説を否定し、中国語が最古の言語であると主張する。グリム童話でおなじみの言語学者グリム (J. Grimm) も、言語は屈折変化しない言語 (分析言語) から屈折変化する言語 (屈折言語) へと移行していくという仮説に沿って、最も分析的な中国語が起源であるという説をとっている。

こうした諸説に共通していることは、ある特定の言語が人類の誕生時から存在しており、それがことばの起源となっていたという考え方である。この考え方は、ことばは神から授かったものであるという宗教的な見解と深く関係している。聖書の創世記には、地上の最初の人間であるアダムが、神の作った動物たちに対して (おそらくヘブライ語で) 次々と名前をつけていくという話がある。それらの動物たちの名前は現在でも用いられているのであるから、命名に使われた言語はアダムの時代、つまり人類が誕生した時から存在していたことになる。

《原始のことば》

ある特定の言語が十分発達した形で人類の誕生時から存在していたことを示すような証拠は何もない。より現実的な考え方は、ことばはもっと単純なものから、次第に複雑なものへと発達してきた、とする見解であろう。

プラトンの『クラテュロス』の中では3人の哲学者が種々の単語の起源について論じているが、そのうちソクラテスとクラテュロスは自然の音を模倣した擬音説を、一方ヘルモゲネスはどの語がどのような意味を表すか

は社会的な約束にすぎないという慣習説をとっている。

擬音説と並んで広くとられているのが、ゼスチャー説である。中でも 20 世紀初頭の動物学者ウォリスは、ゼスチャーで使われる手振りを発声器官でまねたのが音声言語であるという見解をとっている。

18 世紀のロマン主義運動のもとでは、ことばの起源は人間の自然な感情の発露である、という考えが広く流布するようになる。1770 年の王立プロイセン・アカデミー主催による言語起源論文コンテストでは、感情的な発現がことばの起源であるとしたヘルダーの論文が受賞作として選ばれた。ルソーも『言語起源論』（1750 年頃）の中で、人間に「最初に声を出させるのは飢えでも渴きでもなく、愛であり、憎しみであり、憐れみであり、怒りである」（小林善彦訳）という情念起源説を説いている。

19 世紀に入ってダーウィンの進化論が発表されると、その影響が言語起源論にも及んでくる。ダーウィン自身、ことばの起源は動物の叫び声にほかならないとしている。19 世紀の動物学者ヘッケルはダーウィンの進化論に沿って、猿と人間の間に「ことばをもたない人間」という中間的な生物の存在を仮定するが、それを裏付けるかのように、1891 年にジャワ島で原人の化石が発見される。

こうした連続発展説に対して、19 世紀の言語学者ミュラー (M. Müller) は、人間言語と動物の叫び声との連続性を強く否定する。思考のない言語などありえず、また言語のない思考など考えられない。ミュラーの考え方は、人間の理性やことばの独自性を強調したデカルトの理性主義と共通するところがある。

◆考古学の手がかり◆

20 世紀に入ると言語起源の研究は、単なる憶測からより学問的な研究へと変わってくる。その 1 つが、旧大陸で発掘された遺跡を手がかりとした考古学的研究である。考古学の分野では、人間に直接、間接に関係している祖先を、大きく、300 万年～100 万年前の猿人(アウストラロピテクスや

ローデシア猿人など)、100 万年～20 万年前の原人(ジャワ原人や北京原人など)、15 万年～2 万 5 千年前の旧人(ネアンデルタール人など)、3 万年ほど前から現在に至る新人(クロマニヨン人などのホモサピエンス)とに分類している。

《ホモハビリス》

ことばの萌芽を、約 200 万年ほど前のホモハビリスに見い出す研究者がいる。ホモハビリスは、年代的には猿人の時代に属するが、現生人類の直系とみる向きもある。ホモハビリスの遺跡からは石の道具が発掘され、それらの中には将来の狩猟を予想して計画的に作られたと思われるものも含まれている。また石斧で削られた石片からすると、右手が利き手であったことが分かる。右手を支配しているのは 2 つの脳半球のうち左脳であり、左脳の方が優位脳として働いていた、すなわち脳の ^{いっそくか}〈一側化〉(ある機能が主に一方の脳半球によって司られる状態になる)がなされていたことが推定できる。

脳の ^{いっそくか}一側化はことばの使用と深く関わっている(⇒ 15 章)。ことばは、右手を利き手とする者の場合、95 %以上が左脳に一側化している。それゆえ利き手の一側化を、ことばの萌芽とみるわけである。だが脳の ^{いっそくか}一側化は、今日では、人間に固有なものではなく、ネズミから鳥、猿に至るまで観察されることが報告されている。

《ネアンデルタール人》

旧人の 1 種であるネアンデルタール人(6 万～2 万 5 千年ほど前)の洞窟からは、顔料で描いた絵画や、彫刻、模様を彫り込んだ道具などが発見されている。現実の出来事を視覚的に抽象化して再現する能力をもっていたのである。また墓の宝物からは、集団生活が営まれており、その集団に首領が存在していたことがうかがえる。さらに、石の上に刻まれた模様からは一定の意味が読み取れ、それらが簡単な記号として用いられていたことを示唆している。

技術や文化を伝承し、社会集団を統率するには、何らかのコミュニケーションの手段が不可欠である。こうした要求を満たすために、ネアンデルタール人は動物や猿人とは質を異にするコミュニケーションの手段（さらには簡単な文字）をもっていた、と想像することができる。

◆解剖学からのアプローチ◆

ことばの起源を探るもう1つのアプローチは、遺跡から発掘された頭や顎の化石を解剖学的に研究し、発声器官（⇒7章）の状態を復元する方法である。発声器官の状態が分かれば、どの程度のことばが用いられていたかを推定してみることができる。

遺跡から発掘された何十万年、何万年前の化石には当然のことながら、発声器官の重要な部分、すなわち舌や喉頭、咽頭などがそのままの形で残されているわけではない。残されているのはその化石に刻まれた顎と口腔（歯から歯茎、口蓋にかけての空間）などの形だけである。こうした形を手がかりにして当時の生物の発声器官を復元するのである。復元の方法は絶滅した恐竜を復元するのによく似ており、絶滅した生物の骨の化石と、それと生物学的に近い現存生物の骨と筋肉との対応関係を比較して、絶滅した生物の筋肉の状態を復元するのである。原人や旧人を復元する場合、比較の対象となるのは現存の類人猿や人間の新生児、成人である。

《喉頭の下降》

解剖学的方法で復元された発声器官を図示したのが下図である。左か



図1 発声器官と喉頭の位置 (Crystal, 1987)

らゴリラ、ローデシア猿人、ネアンデルタール人、現生人の順で並んでいる。

これらの図から、口腔や喉頭の形は基本的に同じであることが分かる。著しく異なるのは、丸で囲んだ喉頭の位置である。猿や猿人、ネアンデルタール人では水平に延びる舌の末端部に喉頭があるのに対して、現生人では舌から咽頭にかけて曲尺状（水平に延びたのち垂直に降下した形）に延びている気道の端に喉頭がある。つまり、喉頭が著しく下の方に位置しているのである。

喉頭の位置は、肺から送られてくる空気の流れを決め、それに伴って発音可能な音の種類を決めることになる。肺から空気が送り出されると、喉頭は上に向かって動く。喉頭が上方に位置している（すなわち、鼻腔の端の口蓋垂こうがいすいの近くにある）場合には、咽頭が口蓋垂の中に入り込み、その喉頭を通して空気が鼻腔に流れていく。一方、喉頭が下方に位置している場合には、口蓋垂まで距離があるので、喉頭が上へ動いても口蓋垂に届かず、口蓋垂の中に入り込むことはない。咽頭を通過した空気は口腔にも鼻腔にも流れていく。

喉頭を通った空気が鼻腔にしか流れていかなければ、いわゆる鼻音しかつくり出せない。一方、鼻腔にも口腔にも流れていけば、鼻音のほかに口腔音をつくり出すことができる。また咽頭が口蓋垂に入り込んでいないと、舌が軟口蓋に近づいて、軟口蓋子音（[k] や [g]）や母音をつくることができる。

《ネアンデルタール人の発音》

ネアンデルタール人の喉頭は、図 I から明らかなように、猿人と現生人との中間に位置している。猿や猿人の場合のように喉頭が完全に口蓋垂の中に入り込むことはないが、喉頭が口蓋の近くにあるので舌が軟口蓋に近づいていくことができない。

そのためにネアンデルタール人は、鼻音ばかりではなくある程度の口腔音を発音することができたが、その種類は現生人ほど多様ではなかったと